様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 １１ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７００３１

研究課題名（和文）「世界への愛」をめぐる現象学的探究

研究課題名（英文）Phenomenological Approach to the Love of the World

研究代表者
森　一郎（Mori, Ichiro）

東北大学・情報科学研究科・教授

研究者番号：００２３００６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究プロジェクト「「世界への愛」をめぐる現象学的探究」では、ニーチェ、ハイデガー、アーレントの哲学的パースペクティヴに基づき、「人びとととともに‐物たちのもとで‐私は世界に住まう」という根源的事実を現象学的に解明し、われわれの世界を愛することを学ぶレッスンを積むことを試みてきた。公刊した主な研究成果としては、秋富克哉・安部浩・古荘真敬・森一郎編『ハイデガー読本』／『続・ハイデガー読本』（法政大学出版局、2014年／2016年）、ハンナ・アーレント著、森一郎訳『活動的生』（みすず書房、2015年）、フリードリヒ・ニーチェ著、森一郎訳『愉しい学問』（講談社、2017年）。

研究成果の概要（英文）：In this research project “Phenomenological Approach to the Love of the World” Prof. Ichiro Mori has studied the primordial fact of living-in-the-world-with-people-alongside-things from the perspectives of F. Nietzsche, M. Heidegger and H. Arendt, and thus gained the phenomenological lesson how to love our world. His published products are following: Martin Heidegger Handbook I & II (edited by H. Abe, K. Akitomi, M. Furusho & I. Mori, 2014 & 2016). Hannah Arendt, Vita activa oder Vom taetigen Leben (=The Human Condition, translated by I. Mori, 2015). Friedrich Nietzsche, Die froehliche Wissenschaft (=The Gay Science, translated by I. Mori, 2017).

研究分野：哲学

キーワード：世界への愛　ハイデガー　アーレント　現象学　ニーチェ　東日本大震災　活動的生　世代

１．研究開始当初の背景

研究代表者の森一郎は、2014 年 4 月に東北大学・大学院情報科学研究科・人間情報哲学分野の教授に着任し、本科研費研究課題「「世界への愛」をめぐる現象学的探究」に取り組み始めた。「世界への愛」という研究テーマ自体は、それ以前に 21 年間勤務していた東京女子大学時代に抱懐し、着手していたが、それを本格的に展開することを始動させたわけである。

２．研究の目的

(1)「世界への愛」というテーマに森が逢着したのは、一つには、ハンナ・アーレントの思考におけるこのキーワードを、マルティン・ハイデガーの「世界内存在の現象学」とフリードリヒ・ニーチェの「運命愛」の考え方との密接な関連において独自に解き明かしたいという意図を抱いてのことであった。

(2) 二つ目には、2003 年度に研究滞在したドイツ・フライブルク近郊の町の人びとの日常に見出された「世界への愛」の境地を、哲学的に理解したいという狙いがあった。

(3) 三番目には、2009 年に東京女子大学旧体育館解体という事件に立ち会い、そこに如実に示された「世界疎外」というニヒリスティックな現象を見つめ直したいと考えた。

(4) 最後に、2011 年 3 月 11 日に勃発した東日本大震災に見舞われた東北の地でこそ、「世界への愛」を学び、育むことが重要であろうと思われた。

(5) 全体として本研究は、森が 30 年にわたってめざしてきた「現代における哲学の可能性」を、本テーマの追究によって現実化することを主眼とするものである。

３．研究の方法

(1)「世界への愛」という言葉がアーレントの思想圏に属する以上、本研究課題を遂行するには、彼女の基本的な思考態度を自家薬籠中のものとすることが肝要である。とりわけ、主著『人間の条件』で提起されている公／私の区別、労働／制作／行為という「活動的生」の三区分、さらには近代批判としての「世界疎外」論に熟達することが、決定的に重要となる。

(2) また、アーレントの思考の背景をなすハイデガーの哲学を深く理解することが不可欠であり、とくに『存在と時間』で模範的に示された現象学的存在論という方法理念を駆使することが求められる。さらに、ニーチェの遠近法と系譜学、ハイデガーの解釈学的現象学が、方法論的な基盤となる。

(3) アーレント独自の方法としては、ベンヤミン論に示唆されている「真珠採りの解釈学」が有望である。これは、たとえば「ポリス」といった古来の言葉に秘められている根本経験の層に、今日視点から光を当てようとする方法態度であり、ハイデガーの言葉では、「現象学的解体」に相当する。

(4) 森自身は、独自の方法態度として、「始まり（arche）の論理」という原義にかなった意味での「原初論（archaeology）」を提唱しようとしている。死と誕生、終わりと始まりを一体に捉えるその思考は、世代という実存現象を理解するのにきわめて有効であり、かつ、世界への愛の襞をなす「共‐時間性」の多元的な絡み合いを見出すことに役立つ。

４．研究成果

(1) 2014 年度に仙台での活動を開始した森は、東北大学の同僚との連携は言うまでもなく、まずもって、宮城県をはじめとする東北各県の哲学研究者との研究交流のネットワークを構築してきた。とりわけ、新しい組織として、東北アーレント研究会（愛称「ハンナ・アーベント」）を立ち上げ、開催はすでに 5 回を数えた。問題意識あふれる発表と密度の濃い議論が行なわれ、回を重ねるにつれ活況を呈してきている。また、東アジアにおけるハイデガー研究のネットワーク構築のために、韓国・昌原大学の李洙正教授を招いて、「日韓におけるハイデガー研究の発展について――回顧と展望」シンポジウムを 2015 年 9 月、東北大学情報科学研究科で開催した。

(2) 2014 年度の成果としては、『ハイデガー読本』（法政大学出版局）の刊行がある。2006 年に創設された研究組織ハイデガー・フォーラムに集まった全国のハイデガー研究者に執筆してもらい、20 世紀を代表する哲学者の前期・中期・後期の思索の全貌を一挙に明らかにする一書を世に問うた。主要著作に的確な概観を与え、文献案内も充実させて、好評を博した。森は、秋富克哉・安部浩・古荘真敬とともに編者として企画から刊行まで編集全般の重責を担った。

(3) 2015 年度の成果として最も重要なのは、アーレント『活動的生』の訳書をみすず書房から刊行したことである。アーレントの哲学的主著『人間の条件』（英語版 1958 年刊）のドイツ語版（1960 年刊）の翻訳は、世界でも例がなく、日本におけるアーレント受容の深まりを示すものである。500 頁を超える大冊となったが、読者に恵まれ、2017 年 3 月には早くも 5 刷りに達した。特筆すべきことに、本訳書は、難解な哲学書を日本語としての完成度の高い訳文に定着させた点を高く評価され、日本翻訳家協会の第 52 回日本翻訳文化賞を受賞した。

(4) 2016 年度の成果の一つは、『続・ハイデ

ガー読本』（法政大学出版局）の刊行である。『ハイデガー読本』と同じ編者四人による続編で、執筆者はハイデガー研究者に限らず、現代日本の哲学思想研究の最前線で活躍中の 50 名を揃えた。哲学史と現代思想に対するハイデガーの関わりを網羅的にまとめることで、古代から現代までの思想史が一望できる稀有のハンドブックとなった。森は正編と同じくこの続編でも、本論のみならず「序」の執筆を担当するなど、企画と編集の作業全般をリードする役割を果たした。

(5) 2016 年度のもう一つの顕著な成果は、ニーチェ『愉しい学問』の新訳を講談社学術文庫の一冊として刊行したことである。文庫ながら 500 頁近い大冊であり、『ツァラトゥストラはこう言った』と並ぶニーチェの主著を、生き生きとした訳文で読めるようにした功績は、高く評価された。「神は死んだ」「力への意志」「永遠回帰」といった重要思想を考えるうえでの最重要テクストを含み、かつ詩人ニーチェの本領が豊かに展開されたドイツ文学の高峰を、声に出して読める流麗な日本語に再現した本書は、末永く読み継がれてゆくことであろう。

(6) 2016 年度後期には、三年間の研究の締めくくりとして、全学共通科目「哲学・倫理学――3・11 以後の哲学と倫理」の枠で、ニーチェ、ハイデガー、アーレントの思索に拠りつつ、現代世界の危機のただ中から哲学の可能性を掴みとる省察を講述した。その一連の講義ノートを元として、目下、放送大学の印刷教材『現代の危機と哲学』の刊行に向けて鋭意作業中である。まさに「世界への愛」著作構想の第一部をなす本書の出版は、2018 年 3 月を予定しており、その「まえがき」には、本科研費から援助を受けた旨、明記するつもりである。出版準備と並行して、ラジオ放送授業収録を 2017 年夏に集中して行なうことにしており、放送されたあかつきには、森がこれまで行なってきた「「世界への愛」をめぐる現象学的探究」の成果が、世に広く伝えられることとなろう。

(7) 以上とは別に、三年間の成果を目に見えるものとすべく、2017 年 3 月、『世界への愛 Amor mundi』と題する冊子体の科研費成果報告書を作成し、100 部限定非売品として印刷に付した（研究上のつながりの深い各大学の研究者 50 名強に郵送、PDF 版は別途作成）。A4 判で 150 頁近くの紙媒体であり、この一冊だけでも本科研費研究が多大な成果をもたらしたことは一目瞭然であろう。本冊子の内容は、森が以前に行なった講義の講義ノートから採ったものであり、未完ながら、そのはしばしには、「世界への愛」に関する重要な考察とアイデアがぎっしり詰まっている。今回これを公開したことにより、今後の研究の足がかりが得られたと確信している。参考のために、章立てのみ引いておけば、以下のようになる。

「世界への愛 Amor mundi

総序――〈世界〉について
一　コスモスの崩壊――現代の「光景」
二　コスモスの崩壊――現代の「光景」（続）
三　現象学の根本問題としての世界

第一部　ハイデガーからアーレントへ
第一篇　テオーリア、プラクシス、ポイエーシス
序　ある出会い――ハイデガーとアーレント

第一章　制作と存在――ハイデガーとアリストテレス
１）ハイデガーのアリストテレス――存在の問いの成立現場
２）フロネーシスとは何か」
（以上）

(8) 「世界への愛」をテーマとする研究成果の公表としては、2017 年中に『世代問題の再燃――ハイデガーとアーレントとともに考える』と題する連作論集を、明石書店から出版すべく目下準備中である。この単著は、森が近年中心テーマの一つに見定めてきた「世代」という問題をめぐって書き綴ってきた試論を収録するものである。『死と誕生――ハイデガー・九鬼周造・アーレント』（東京大学出版会、2008 年）、『死を超えるもの――3・11 以後の哲学の可能性』（東京大額出版会、2013 年）に続く、三部作の総仕上げをなす哲学論考集成となろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１１件）

①森一郎「どこまでわれわれは哲学をすすめられるか」、ギリシャ哲学セミナー編『ギリシャ哲学セミナー』第 14 号、2017 年 3 月、75-87 頁、所収。（査読なし）

②森一郎「禁欲主義と実存の美学――ニーチェ、九鬼周造、フーコー」、『理想』第 698 号、理想社、2017 年 3 月、80-91 頁、所収。（査読なし）

③森一郎「労働と世界――草取り、落葉拾い、大掃除、田植え」、岩手哲学会編『フィロソフィア・イワテ』第 48 号、2017 年 1 月、39-52 頁、所収。（査読なし）

④森一郎「形而上学的時間と歴史的時間――九鬼周造と三木清」、『現代思想 1 月臨時増刊号 総特集 九鬼周造』、青土社、2016 年

12 月、118-131 頁、所収。（査読なし）

⑤森一郎「取り返しのつかなさと時間性――「ハイデガー、木村敏、アーレント」覚え書」、『現代思想 11 月臨時増刊号 総特集木村敏』、青土社、2016 年 10 月、238-251 頁、所収。（査読なし）

⑥森一郎「政治的なものに対して哲学的にいかに語り返すか――アンダースとアンスコムの場合」、『みすず』第 651 号、2016 年 8 月、26-33 頁。（査読なし）

⑦森一郎「政治に対する哲学する者たちの応答可能性――ハイデガーという事例を手がかりに」、日本哲学会編『哲學』第 67 号、2016 年 4 月、42-58 頁、所収。（査読なし）

⑧森一郎「エネルゲイアのポリス的起源――アーレントとアリストテレス」、『理想』第 696 号、理想社、2016 年 3 月、114-125 頁、所収。（査読なし）

⑨森一郎「ポイエーシスと世代出産性――『饗宴』再読」、哲学会編『「いのち」再考』哲学雑誌第 130 巻第 802 号、有斐閣、2015 年 10 月、98-115 頁、所収。（査読なし）

⑩森一郎「出産と世話の現象学へ」、ハイデガー・フォーラム編『Heidegger-Forum vol. 9』、2015 年 5 月、21-36 頁、所収。（査読あり）

⑪森一郎「リニア中央新幹線について、立ち止まって考える」、『季刊　創文』2015 年春（17）号、2015 年 3 月、創文社、1-3 頁。（査読なし）

〔学会発表〕（計１０件）

①森一郎「私には見えないのに、あなたには見えるものって何？」、第 16 回河合臨床哲学シンポジウム発表、於東京大学弥生キャンパス、2016 年 12 月 11 日。

②森一郎「どこまでわれわれは哲学をすすめられるか」、ギリシャ哲学セミナー第 20 回大会シンポジウム提題、於国際基督教大学、2016 年 9 月 18 日。

③森一郎「労働と世界――草取り、落葉拾い、大掃除、田植え」、岩手哲学会第 50 回大会公開講演、於岩手大学、2016 年 7 月 16 日。

④森一郎「ハイデガーからアーレントへ――世界と真理をめぐって」、実存思想協会第 32 回大会公開講演、於高千穂大学、2016 年 6 月 25 日。

⑤森一郎「政治に対する哲学する者たちの応答可能性」、日本哲学会第 75 回大会シンポジウム提題、於京都大学、2016 年 5 月 14 日。

⑥森一郎「世代の問題――マンハイムと三木清」、明治大学人文科学研究所総合研究「現象学の異境的展開」主催 2015 年度クロージングシンポジウム提題、明治大学駿河台キャンパス、2016 年 3 月 19 日。

⑦森一郎「アーレントとリニア新幹線――『活動的生』のテクノロジー論から」、アーレント研究会 2015 年度大会シンポジウム提題、於一橋大学国立キャンパス、2015 年 8 月 8 日。

⑧森一郎「産むことと育むこと、もしくはポイエーシスと世代出産性」、哲学会第 53 回研究大会シンポジウム提題、於東京大学駒場キャンパス、2014 年 11 月 2 日。

⑨森一郎「〈終わりへの存在〉に本来形はあるか」、第 25 回日本老年医学会北陸地方会公開講演、於金沢市近江町交流プラザ、2014 年 10 月 25 日。

⑩森一郎「出産と世話の現象学へ」、ハイデガー・フォーラム第 9 回大会応募発表、於東洋大学白山キャンパス、2014 年 9 月 20 日。

〔図書〕（計９件）

①森一郎『世界への愛 Amor mundi』（2014～2016 年度科学研究費補助金 基盤研究(c)「世界への愛」をめぐる現象学的探究 研究成果報告書、研究代表者 森一郎）、2017 年 3 月、1-147 頁。

②フリードリヒ・ニーチェ著、森一郎訳『愉しい学問』、講談社、2017 年 1 月。1-507 頁。

③鹿島徹／越門勝彦／川口茂雄編『リクール読本』、法政大学出版局、2016 年 7 月。（森一郎「リクールとアーレント 「赦し」を中心に」153-162 頁、担当。）

④秋富克哉／安部浩／古荘真敬／森一郎編『続・ハイデガー読本』、法政大学出版局、2016 年 5 月。1-395 頁。

⑤ペーター・トラヴニー／中田光雄／齋藤元紀編『ハイデガー哲学は反ユダヤ主義か』、水声社、2015 年 9 月。（森一郎「ハンナ・アーレントと「反ユダヤ主義」――アーレント『ユダヤ論集』を読む」287-296 頁、担当。）

⑥齋藤元紀編『連続講義 現代日本の四つの危機 哲学からの挑戦』、講談社、2015 年 8

月。（森一郎「世界の終わりと世代の問題」207-230 頁、担当。）

⑦ハンナ・アーレント著、森一郎訳『活動的生』、みすず書房、2015 年 6 月、1-526 頁。

⑧秋富克哉／安部浩／古荘真敬／森一郎編『ハイデガー読本』、法政大学出版局、2014 年 11 月、1-393 頁。

⑨河出書房新社編集部編『KAWADE 道の手帖 木田元　軽妙洒脱な反哲学』、河出書房新社、2015 年 12 月。（森一郎「木田元拾い読み――ハイデガーをいかに面白く論ずるか」79-83 頁、担当。）

６．研究組織

(1)研究代表者

森　一郎（MORI, Ichiro）
東北大学・大学院情報科学研究科・教授
研究者番号：００２３００６１